

## 地球の温暖化

- 1 地球温暖化は、大気中の二酸化炭素の増加だけではないとする学説。  
マグマ活動の活発化の問題。

<http://www.ailab7.com/Cgi-bin/sunbbs/index2.html>

- 2 プレートテクトニクス理論の矛盾

海膨の近くにこのような火山群があることは、プレートテクトニクス理論とは矛盾します。  
誕生したばかりである筈の海底に、火山があちこちに点在するというのはプレートの概念とは相入らないものです

<http://www.ailab7.com/Cgi-bin/sunbbs/index2.html>

- 3 それは、1994年秋にイギリス、リーディング大学の3人の科学者が「ネイチャー」に発表した論文である。  
彼らが化石の中の酸素同位体などの調査をもとに行った研究によれば、恐竜の全盛期であった白亜紀(1億4400万年前～6500万年前まで)の地球大気には2000PPm、つまり現在の8倍もの二酸化炭素が含まれていた。  
ところが当時の平均気温は、いまとほとんど同じだったという。  
つまり、二酸化炭素の量によって地球の大気温度を単純に予測することはできないということである。  
温度を動かすメカニズムは他にあるのだ。

<http://www.ailab7.com/ondanka.html>

※地球磁気異常説による天候不順を唱えるうえでは、参考となる意見である。  
従来の学説に疑問がもたれている。

私の理論は単純に言えば、地球の核のFe,Niは、そこにあるだけでは何の反応も起こさない。  
しかし強磁性体の残りのコバルトは地表にあって、地表や太陽のプラズマからの電荷を集めて、コアに注入する役目を果たす。  
もし、コバルトがコア内にあると、電荷は集められない。だから、地殻にある。  
そのほとんどのコバルトがコンゴにある。世界の約65%が集中している。  
コンゴにあるコバルトの仕事はアースホールのあるニイラゴンゴ火山からコアに向かって地球表面の電荷を地下のコアに注入することである。  
静電誘導により、コア内のNi, Feは励磁し、地球の北極、南極に磁界を引き起こす。  
従って、アースホールに十分な電荷が集まらないとき(電荷がコンゴへ移動する途中で噴火するようなこと。ガス漏れのようなもの)  
コア内の電荷不足で磁気異常が発生する。ちなみに、恐竜絶滅の6500万年前は地球の磁気はなくなっていた。

たぶん火山噴火がありすぎだったため、磁気が正常に発生していない気がする。  
磁気異常になった以後は、磁気水の話となり、光合成の補助エンジンが機能しなくなって、シアノバクテリアの光合成だけでは  
追い付かず、大気中の酸素欠乏へとつながる。

すなわち、この時は二酸化炭素が急激に増えていったはずである。  
ここで上記のイギリス、リーディング大学の3人の科学者の論文と比べる。

**大気中の二酸化炭素は何と現在の8倍とある。**

すなわち、これを現在の酸素含有量程度までに修正するためにはシアノバクテリアによる光合成の効果は1に対し、  
磁気化による光合成補助エンジンの効果は7倍も必要である。2に対して6である。

光合成補助エンジンがフル回転しても十分追い付かなかったと思う。

ちなみに二酸化炭素は酸素の27倍、水に溶けやすいので、水中の酸素は今のおそらく1/3ぐらいと思う。

これでは、バクテリアが増えても意味がなく、酸素の大気への補給は追い付かない。

バクテリアは、そんなに急激に増えていないどころか、意に反して、むしろ減っていたかもしれない。

大気・水中環境が悪すぎて、まさに当初の予言通り、大気も水中も酸素欠乏症である。恐竜の絶滅主原因である。

